# 関川村災害ボランティアセンター派遣支援
# ふりかえり

（活動期間：2022 年 8 月 9 日～9 月 11 日）

「9 月 11 日派遣完了　関川村ボランティアセンタースタッフと記念撮影」

日本防災士会・新潟県支部

### ■「新潟県北豪雨」の被害状況

8月4日に発災した水害は、「新潟県県北地域豪雨災害」と名付けられ新潟県北（村上市、胎内市、関川村）に甚大な被害をもたらした。

8月3日〜4日に線状降水帯発生情報が3回、大雨特別警報（警戒レベル5相当）が村上市、関川村、胎内市に発令、記録的短時間大雨情報2日間で16回発表され、土砂災害警戒情報10回を記録した。関川村下関では、全国歴代6位となる1時間雨量149㎜を観測した。新潟県全体で床下浸水1467棟床上浸水852棟の被害であった。特に村上市、関川村で被害が多かった。当該地域では、過去には1967年（昭和42年）に「羽越水害」死者104名だす大災害があり一級河川荒川では治水計画が見直され堤防決壊などは無かったものの荒川に流入する支川合流部の氾濫や低平地の内水氾濫、土砂災害危険箇所からの土石流による被害が顕著であった。ただ「死者0」であったことが救いであった。

### ■8月4日災害発生

8月4日早朝6時前、NHK新潟放送局の報道担当の方より防災士会用のスマホに直電、「NHK新潟放送局と日本防災士会・新潟県支部連携協定により電話しています。村上方面で災害が発生しています。至急村上市周辺の防災士を紹介してほしい」と私の寝ぼけた頭にただならぬことが起こっていることがわかった。

即時、関川村の県支部防災士の携帯電話に電話するが「電源が入っていない」とのアナウンス「なにかあったか？」と心配したが固定電話に電話して幸い繋がった。「雷で携帯基地局がやられているらしい」とのことで「ほっと」した。「自宅は床下浸水の被害がでているし土石流の被害がありあちこちで交通が寸断されている」とのこと。その日の昼には、関川村佐藤防災士「高齢の母親を垂直避難」のニュースがNHKから流れていた。報道の素早さとNHKとの連携協定の責任の重さを痛感した。

### ■被災地視察

8月7日（日）新潟県支部学校防災教育推進部長と被災地に入った。住民の方や親戚の方が懸命に畳や家財を運ぶ様子を目の当たりしながら関川村の県支部防災士が経営する古民家カフェ「元麹屋」を訪問した。次に村上市防災士会長を訪れた。村上市防災会（市主催の会）は、250名の会員がおり「しっかりした組織」という印象を感じた。そして胎内市の現副支部長を訪ねて総合建設業株式会社に向かった。休日にもかかわらず社長自ら出社して災害対応の陣頭指揮にあたっていた。（防災士は、多才な方が多い）皆さんに直接お会いして被害状況や支援物資などのヒアリングをおこなった。週明けからの災害ボランティアセンター設置の情報も得て当会も災害ボランティアの体制を急がねばと感じて帰路についた。

### ■新潟県支部　関川村VCに出動

8月8日（月）新潟県社会福祉協議会の課長代理よりスマホに直電「ボラセンのスタッフが不足している明日から防災士を派遣してください」「村上市でも関川村でもかまいせん」現地視察が役立った村上市は地元防災士会しっかりしているので「新潟県支部は、関川村を集中して手伝います。」と即答した。

その日の夕方から電話をかけまくり、ようやく4名の県支部会員を確保した。この日から毎日、2〜4名の防災士を派遣する活動が始まり「VCには、防災士がいる」体制が出来上がっていった。

### ■VCでの防災士の一日の作業の流れ

VCの朝は早い。関川村は、村上市からさらに山手に進み新潟市から片道75km高速道路を利用しても1時間15分程の距離にある。毎日、防災士会からミーティングに参加すべく新潟市の自宅を6時前に出発する。ボランティアの受付は、9時からだが、8時30分には、ボランティアが集まりはじめ説明会が始まる。

防災士会は、資材・送り出し班を担当した。8時には、班ミーティングを実施し昨日までの問題点・課題などについて共有して、資材の在庫数量の確認をおこなった。

防災士は、ボランティアの訪問先と作業内容を確認して資機材などをチョイスして貸出をするのが役割だ。ボランティア送出しのピークは、9時〜10時半頃、マスクで見えないがディズニーランドのスタッフのごとく「笑顔」で、ボランティアが乗り込むワゴン車に手を振った。

空いた時間には、支援物資の仕分け、資機材の組立など、閑散期には、被災家屋の泥出しを手伝った。VCスタッフの防災士は、ゼネコンOB、建設資材会社OB、電気工事技師、国土交通省OB、海運機関士、学校協働活動推進員、災害ボランティア経験

者などキャリアが豊富な方々である。資機材の扱いや組立などはお手のもので、社協の若いスタッフから「防災士さん次これ手伝って」と次々と声が掛かる。午後3時を過ぎるとボランティアの皆さんが泥だらけで帰って来る。資機材の泥落としと泥だらけのトラックの清掃などが仕事となる。

**■「事故0」「欠員0」「感染症の発症0」で終える**

新潟県支部は、関川村社協から重宝され、「延長、再延長」で結局、VCスタッフとしては、最後の一団体となり、9月11日のVC縮小の日まで連日お手伝いした。活動日数31日間、延べ98人の防災士を派遣した。コロナ禍で新潟県においても連日3000人を超える感染者が出るなか、新潟県支部は、独自の「スタッフ健康観察シート」や入場者管理として「シフト表」と「連絡リスト表」を関川村社協と新潟県社協とに情報共有したことが行政からの信頼を獲得したと考えている。

**■やりとげた充実感と感謝**

今回は、コロナ禍で県外からの人的支援が受けられず自県でなんとかしなければならない災害だった。

まずは、派遣に応じてくれた新潟県支部会員の健康管理と、遠方にもかかわらずガソリン代だけの支給で現地まで駆けつけてくれた心意気に感謝したい。

また、現地の土嚢袋の不足に対応し、3000枚の土嚢袋を即座に提供いただいた日本防災士機構と日本防災士会。そして、新潟県支部の活動に共感して支援金を集めて提供していただいた奈良県支部のみなさん。日頃から総会や研修会などの情報共有をしている北信越支部連絡協議会（富山県、石川県、福井県）の各県支部からも個別に支援金の提供がありましたことを、厚く感謝と御礼を申し上げます。

「情報発信の大切さ」とそれに「共感」して「応援」してくれる方々が全国にいらっしゃる組織であることを実感いたしました。

最後に、「明るく働きやすい素晴らしいボランティアセンター」を運営してくれた関川村社会福祉協議会のみなさまと新潟県災害ボランティア調整会議のみなさまには、「深い感謝」を申し上げます。

**■研修による「日頃からの準え」が今回の活躍に**

新潟県支部は、令和元年に災害ボランティアを組織的に実施することを目的とし、「新潟県災害ボラティア調整会議」（主催 新潟県社会福祉協議会）の最も後発である16番目の構成団体のとして登録した。調整会議で実施している「災害ボランティアコーディネーター資格」の取得を新潟県支部会員に推奨している。研修は、年1回3日間で実施され、新潟県内の市町村社会福祉協議会職員とボランティアセンターの運営にたずさわる団体のメンバーが参加し「災害ボランティアとは」から始まり「災害ボランティアセンターの機能や運営」について研修を受けている。これらの研修制度や災害報告会・防災イベントに出席して新潟県社会福祉協議会やNSVN（にいがた災害ボランティアネットワーク）との連携を3年にわたり深めてきたことが今回の活躍の要因と言えよう。

「災害ボランティア」をはじめ「災害ボランティアセンター運営」を実施するうえで、社会福祉協議会と防災士会県支部の連携は、「必須」と言える。

**■「防災は、すそのが広い」もっと連携を**

新潟県支部は、毎年多方面の専門組織との連携協定を結んでいる。令和元年度に新潟県社会福祉協議会と災害ボランティア調整会議通しての連携、令和2年度にNHK新潟放送局、令和3年度に新潟大学災害・復興科学研究所および新潟県との「防災・減災啓発活動について特化した」連携協定。今年度も2つの団体と連携協定を結んでいくことで打合せを行っています。今後は、もっと幅広いニーズに対応できる支部として「産・官・学・ボランティア」のすそのが広い展開を考えている。

（文：日本防災士会・新潟県支部事務局長成川一正）

災害ボランティアと社協スタッフと防災士が「集結」